

# 武蔵野大学経営研究所紀要の創刊によせて

古川 一郎 (武蔵野大学 経営研究所 所長、経営学部 教授)

武蔵野大学経営研究所の紀要を創刊にあたり、本紀要の目指すべき姿を考える意味で、ここに至るまでの歴史をまず簡単に振り返っておきたい。本学は、建学の祖である高楠順次郎先生により、仏教の根本精神である四弘誓願を根幹として、1924年に武蔵野女子学院として築地本願寺の境内で生まれた。戦後はながらく武蔵野女子大学として知られており、武蔵野大学へと名称変更したのは2003年であり、男女共学として新たなスタートをきった。その後、本学の建学の精神を「世界の幸せをカタチにする」というブランド・メッセージとして掲げ、次々と学部・大学院・研究所を設立し、質的にも量的にも大きく変貌を遂げつつ現在に至っている。このような熱気の中で、2019年度から新たに経営学部とデータサイエンス学部が、それに合わせて経営研究所とアジア AI 研究所が設立された。これにより武蔵野大学は、11学部19学科を擁する大学となり、2024年度にはいよいよ開学100周年を迎える。開学から見れば長い歴史があるが、総合大学として新たな目標に向かって動き始めてからはまだ20年もたっていないのである。

このような中で、経営学部とデータサイエンス学部が同時に新設されたことは決して偶然ではないだろう。それは生活に直結する多くの領域で、コミュニケーション、エネルギー、ロジスティクス、そして最近ではライフサイエンスといった分野で、情報技術の進展に誘発され相互に連結したイノベーションが、新しい時代へと社会を推し進めているからである。AIとIoTが世界の仕組みを変えつつある中で、我々の生活も企業活動も大きな変動期に入りつつある。このような背景の中で、大学には新しい時代に対応する理論研究や人材育成が求められているのである。

当然、経営学に対する関心も高まっている。たとえば、近年ビジネス界でも注目されているSDGsの一項目である“つくる責任とつかう責任”は、つくる人々とつかう人々が相互に影響しつつ社会における新しい生産と消費のあり方を模索する中で、関心を集めているのである。このことが企業の経営の在り方

を問い、私たちのライフスタイルを問い、経営学への関心を高めている。GAFAに代表されるプラットフォーム・ビジネス、MaaSに代表されるモノではなくコトのビジネス、サブスクリプション・モデルやシェアリング・エコノミーといった新しいビジネスモデルが次々と現れる中で、これまでにない大きなうねりが社会に押し寄せてきていることを実感する。

これからの新しい時代に、私たち自身がどのようなライフスタイルを求めているのか、それを実現する生活空間や企業社会の構造が10年後20年後にどのようなになっているか、過去の延長線上にない未来を正確に予測することはできない。それは、未来の社会は私たち自身の手によって偶発的に作られていくからである。しかし、大学には少なくともそのような未来の社会を作っていくリーダー足りうる人材育成の責務がある。すなわち、多様な人々と共創し新しい社会を作っていく人材になるための基礎的な能力が身につく教育が実践されなければならない。

そのためには、基盤となる理論的な研究を充実させることも極めて重要である。大学には、政治、法律、教育、経済、経営、データサイエンスやライフサイエンス、建築、環境、介護や看護、さらに思想・哲学やアートなど様々な分野に関心を持ち、社会的な課題に向き合う多くの専門家が集っている。このようなダイバーシティに恵まれた環境は大学固有のものであり、大学を取り巻く外部の様々な主体と共同研究することも大学なら可能である。もちろん、大学はこれまで諸先輩のたゆまぬ努力により営々と蓄積されてきた知の宝庫でもある。幸いなことに、経営学の研究者は時代の変化に敏感である。本紀要がこれまで蓄積されてきた知を受け止めつつ、新しい社会を見据えた「世界の幸せをカタチにする」ための経営学の新しい優れた研究成果が生まれる場となり、それらがタイムリーに広く社会に発信されるメディアとして育っていくことを望む。